

4. 倒置＝奇抜な語順で相手の注意を引く方法

倒置は一般的に＜慣習的文法倒置＞と＜特定の語の強調倒置＞の 2 つに分けるのが通例。

- ・ **There is** a book on the desk.
- ・ "**Do you** have the time?" "It's eight fifteen."

これらを普段は倒置だと意識しては使っていないので、「慣習的・・・」という言葉で呼んでいるのだろう。けれども、本来倒置は eyecatcher（人の耳目を引きつけるもの）以上の機能はない。一番目立つのが文頭なので、特定の語句を文頭に出してその異常性を強調する。<there>や<here>はまさに eyecatcher（注意語）で、「ほらそこ！」「ほらここ！」と相手の注意・注目を引きつける効果がある。疑問文も、普通とは違う語順を相手に示すことで疑義・疑念を表明しているわけだ。その意味で倒置は全て＜強調倒置＞と捉えても不都合はない。

＜慣習的文法倒置＞

Though[X As] it was **unbelievable**, they actually welcomed us.
 → **Unbelievable** though[as] it was, they actually welcomed us.
 * 形容詞・副詞を文頭に出して強調する。通常の語順では「～なのだが」の譲歩表現は「as」ではなく「though」を用いる。特定語句が文頭に出るだけの＜一部逆転型＞と捉える。

＜特定の語の強調倒置＞

It **never** occurred to him that she was lying.
 → **Never** did it occurred to him that she was lying.
 * 否定語を文頭に出して強調する。残りの部分が疑問文の語順になる＜疑問文型＞の倒置。

上の 2 例を見比べて、＜慣習的文法倒置＞と＜特定の語の強調倒置＞に分ける必要があると誰が思うだろうか。例えば一部の参考書（『ロイヤル英文法』・旺文社）では次の 2 つの英文を一方は倒置、他方は倒置ではないと説明する。

＜倒置？＞

Though they tried **hard**, they couldn't get out of debt.
 → **Hard** though they tried, they couldn't get out of debt.
 一生懸命やったが、借金生活から抜け出せなかった。

＜倒置ではない？＞

I can't say **that**.
 → **That** I can't say.
 そんなことは僕には言えないよ。

どう考えても上が倒置なら、下も倒置だ。こんなクダラナイ分類をやっているから『英語は絶対勉強するな』なんて本がベストセラーになってしまう。倒置は＜特定の語句を文頭に置くことによって、その他の語句の語順がどう変わるのか＞と言う視点で捉えるのが一番自然なやり方。そう考えると、倒置は単純に次の 4 つのうちのどれかに分類できる。

- ・ 完全逆転型 = 文末にある副詞を文頭に出すと、残りの語句の順序が完全に逆転する。
- ・ 一部逆転型 = 特定の語句だけが文頭に出て、他の語順は変わらない。
- ・ 疑問文型 = 否定語等を文頭に出すと、残りの語順が疑問文になる。
- ・ 強調構文型 = 元の英文に<It is ~ that ~>の枠を加えて名詞を強調する。

4-1 一部逆転型＝第 3 要素の強調

以下は単なる私感であり、学術的根拠は一切ないので、そのつもりで聞いて欲しい。長年和英翻訳をやっていると、文の構成要素が「SVC」「SVO」の時に英文が最も安定することに思い至った。別の言い方をすると、あらゆる表現の基本ユニットがこの「SVC」「SVO」であり、あらゆる意志の表現・発話は「SVC」「SVO」に換言することができる。

I Everybody laughed.	→<Everybody>	<laughed at>	<the funny story>.
II Her eyes are blue.			
III I love you.			
IV I gave her my address.	→<I>	<gave>	<my address> to her.
V I had her waiting so long.	→<I>	<had>	<her>.
			↑ waiting so long

<laugh>は本来自動詞だが、I 型「皆が笑った」では文は安定しない。一体何がそんなにおかしかったのかが分からないからだ。元来 I 型は、文の構成要素がたった 2 つだけなので、言いたいことが伝わりにくく不安定な文型だ。「laugh at」という他動詞を用いて文を III 型に変えることで笑いの対象が明示され文は安定する。IV も III 型に変換することで、「誰に」や「何を」のどちらを強く相手に示したいのかが明確になる。V 型は III 型がベースとなって構成されている（後述）。「SV～」までは文構造の基本なので、次に来る「C」「O」は非常に大切な文の要素だと言うことが分かる。一部逆転型の倒置は「SVC」「SVO」の 3 番目の構成要素である「C」「O」を文頭に出すことで強調効果を狙う手法だ。命名の仕方に少々難はあるが、「第 3 要素の強調」とはそういう意味で使っている。

4-1-①形容詞・副詞+as/though+SV
 ★次の表現が狙われる！
 Though he is **young**, he is rich.
Young as he is, he is rich.

4-1-②目的語+SV
 ★次の表現が狙われる！
 I can't say **that**.
 → **That** I can't say.

この 2 つのタイプの過去問はついに見つけられなかった。かといって「①形容詞・副詞+as/though+SV」はいつ出題されてもおかしくないのでは、軽視して良いわけではない。

4-2 疑問文型

4-2-① so, neither, nor が文頭に来る場合

<例題28>

I can't speak French, and () () () () ().
 ① brother ② neither ③ can
 ④ my ⑤ younger

I can't speak French, and (neither)(can)(my)(younger)(brother).

→僕はフランス語が話せない。弟もそうだ。
 ・消去の法則を用いてつなぎ語<and>と動詞<can't speak>をまずは削除する。
 ・<and>以降には完全な文の要素が来るはずだが、助動詞③<can>があっても動詞がない。
 ・主語候補の名詞は④⑤①を合わせて<my younger brother>。
 ◎②<neither>に注目して動詞が不足しても良い英文を組み上げると疑問文型の倒置文しかありえない。

★次の表現が狙われる！

この「neither」は副詞。つなぎ語ではないので、本来ならば「and」が必要なのだが、省略も可能。「neither A nor B」の場合は接続詞でつなぎ語。動詞は「B」に呼応する。

<副詞>

The husband doesn't work hard, [and] **neither** does his wife.

<接続詞>

Neither the husband **nor** his wife works hard.

<例題29>

I have never seen her since then, () () () () ().
 ① want to ② nor ③ I
 ④ see her again ⑤ do

I have never seen her since then, (nor)(do)(I)(want to)(see her again).

→彼女にそれ以来会ってはいないが、もう一度会いたいとも思わない。
 ・前半のコマまでで文は完結している。
 ・後半の動詞候補は<have never seen>、④<see her again>と⑤<do>の3つ。①<want to>は助動詞扱い。
 ・つなぎ語は<nor> 1つなので、<see>か<do>のどちらかが動詞の皮をかぶった偽物。
 ・後半の主語候補は③<I>のみ。
 ◎②<nor>に注目すると、<do>は助動詞で疑問文型の倒置だと分かる。

★次の表現が狙われる！

He likes tea and his wife likes it, too.
 → He likes tea and his wife does [so]. (△)
 → He likes tea and **so** does his wife.
 彼はお茶が嫌いだ。彼の妻もそうだ。

I have **never** been there, **and** I will **never**[=not ever] go.
 → I have never been there, **nor** I will ever go. (△)
 → I have never been there, **nor** will I ever go.
 そこへ行ったこともないし、また行く気もしない。

4-2-② 否定語が文頭に来る場合

<例題30>

() () () () () () () () () than they forgot their dependence on heaven.
 ① they ② no ③ safe
 ④ sooner ⑤ feel ⑥ did

(No)(sooner)(did)(they)(feel)(safe) than they forgot their dependence on heaven.

→身の安全を感じるとすぐに、彼らは神のお陰で生きていることを忘れた。
 ・後半文は完結している。
 ・動詞候補は<forgot>と⑤<feel>そして⑥<did>の3つ。
 ・つなぎ語は<than> 1つなので、⑤<feel>か⑥<did>のどちらかが動詞の皮をかぶった偽物。
 ・主語候補は①<they> 1つだから、<they feel safe>の可能性しかない。
 ◎否定語②<no>に注目すると疑問文型の倒置で⑥<did>が助動詞だと分かる。

<例題31>

In () () () () () () () there.
 ① I ② to go ③ no circumstances
 ④ you ⑤ allow ⑥ will

In (no circumstances)(will)(I)(allow)(you)(to go) there.

→どんな事情であろうとも、僕は君がそこへ行くことを許さない。
 ・文頭副詞が未完成。文頭の前置詞<In>の直後は名詞。
 ・動詞候補は助動詞と組み合わせて<will allow>だけ。
 ・主語候補の名詞は①<I>と③<no circumstances>そして④<you>の3つ。
 ・つなぎ語は皆無なので、3つの名詞に in+名詞、主語、目的語の役割を割り振ることになる。
 ・動詞⑤<allow>の導くパターンを考えると<allow you to go >の可能性が高い。
 ◎ならば文頭は<In no circumstances>となり、文頭に否定語が出ているので疑問文型の倒置にする。

<例題 3 2 (難)>

Not () () () () () its value.
 ① our health ② we realize ③ we lose
 ④ do ⑤ until

Not (until)(we lose)(our health)(do)(we realize) its value.

→健康を失って初めてその有り難さが分かる。
 ・文頭が<Not>から始まる場合、「否定の分詞構文」と「否定語の文頭への倒置」。
 ・主語・動詞候補は<we realize>と<we lose>。
 ・つなぎ語は<until>だから、本来なら<Until we lose our health, we **do not** realize its value.>としたいのだが、<do not>の収まりが悪い。
 ・ならば「Not until」を否定語として文頭に出し、疑問文型の倒置にするしかない。
 ◎<Not until do we lose ~>にはならないことに注意。<until+文>は 1 セットとして扱わなくてはならないからだ。

★次の表現が狙われる！

No sooner had S+過去分詞~ than
 Hardly[Scarcely] had S+過去分詞~ when[before]
 Little ~
 Not until ~
 no+名詞

* 「not until」がセットになるのは、上の例題 3 2 の否定語と強調構文だ。
It is not until we lose our health **that** we realize its value.

<例題 3 3 >

Only when he needed money () () () () ().
 ① to ② write ③ did
 ④ he ⑤ his parents

Only when he needed money (did)(he)(write)(to)(his parents).

→金に困ったときだけ彼は両親に手紙を書いた。
 ・前半で文は完結している。
 ・動詞候補は<needed>、②<write>と③<did>の 3 つ。つなぎ語は<only when> 1 つだから、<write>か<did>のどちらかは動詞の皮をかぶった偽物。
 ・主語候補は<he>と<his parents>だが、<he>は目的語にはなれないので、<he>は主語以外ありえない。
 ・<he did to his parents>はありえないから<he write to his parents>としたいが、<write>が原形であるのもおかしい。時制は過去の流れにあるので<did>を助動詞として使わざるを得ない。
 ◎文頭の<Only>は否定語だから、疑問文型の倒置にすれば<write>が原形のままでも良いことに思い至るか？

★次の表現が狙われる！

「only+副詞節・副詞句」
 We can see pandas <**only** in some zoos>.
 →<**Only** in some zoos> can we see pandas.
 パンダに会えるのは一部の動物園だけです。
 * only は副詞なので単独では存在できず、only が飾る副詞と共に文頭に出すことになる。

4-2-③仮定法の if を省略した場合

<例題 3 4 >

() () () () (), call me at the office.
 ① he ② should ③ leave
 ④ refuse ⑤ to

(Should)(he)(refuse)(to)(leave), call me at the office.

→万ー彼が帰るのをぐずったら、会社に電話してください。
 ・後半は文が完結している。
 ・動詞候補は<call>と選択肢中の③<leave>、④<refuse>の 3 つ。しかし、つなぎ語がない。
 ・仮につなぎ語が省略されているのであれば、<leave>か<refuse>のどちらかは動詞の皮をかぶっている。
 ・主語は<he>以外になく、<should><refuse to>は助動詞候補なので、<he should refuse to leave>に思い当たるが、つなぎ語がないのはどうしようもない。
 ◎ここで仮定法のつなぎ語 if の省略に思い当たるかどうか勝負。
 * 「should」が用いられるのは可能性として次の 4 つ。
 ①仮定法未来の条件説中で「失望の仮定」
 ②仮定法の帰結節中。
 ③びっくり should、がっかり should、当たり前だの should
 ④「should have+p.p.」で「するべきだったのにしなかった」

★次の表現が狙われる！

この表現はシェークスピア時代からの古典的な表現で、現在では書き言葉でさえ使わない。元々は祈願文の一種で、疑問文でもないのに助動詞から文を始めることで、eyecatcher の役割を果たしていた。こんな表現が今でも大学入試に出題されるので、「日本の英語は明治時代からたいして進歩がない」などと言われることになる。
 May God bless you! 神の恩寵があなたにありますように！

仮定法は思うようにならない現実とは反対のことを思い浮かべる時の動詞表現（法）なのだから、当然祈願文に近い（助動詞は動詞とセットで扱われることは言うまでもないね）。

If World War II **had** ended two years earlier, how many lives would have been saved!
 → **Had** World War II had ended two yeas eariler, ~

If Bill **should** call me, tell him he can come at any time.
 → **Should** Bill call me, ~

If I **were to** take over my father's business, I would make a drastic reform.
 → **Were** I to take over my father's business, ~

助動詞の操作法なのだから、助動詞（またはその一部）が文頭に出るのが普通。ところが<were to>にひきずられて次の表現も可能となった。

If I **were** a bird, I could fly to you.
→ **Were** I a bird, ~

けれども、原則として助動詞を含まない文は i f を省略しない。

If I knew the truth, ~
→ Did I know the truth, ~ (X)

4-3 完全逆転型

4-3-① There 構文の場合

<例題 35>

() () () () in the house.
① no one ② be ③ to
④ there ⑤ happened

(There)(happened)(to)(be)(no one) in the house.

→ たまたまその家には誰もいなかった。
・ 動詞候補は②<be>と⑤<happened>の 2 つだが、つなぎ語がないのでどちらかが動詞の皮をかぶっている。
・ 主語候補は①<no one>だが、④<there>に注目し<There is ~>を基調とした文にすることを考える。
・ 助動詞候補として⑤⑥で<heppened to>が可能。

★次の表現が狙われる！

「There is ~.」だけでは語句整序問題は成立しない。そこで色々な助動詞を組み合わせることになる。

There was something queer about it.
→ There **was thought to** be something queer about it.
それにはどこか妙なことがあると思われていた。

There was a war.
→ There **was likely to** be a war.
戦争が起こりそうだった。

There { seems to
used to
is thought to
is believed to
is likely to } be ~

<例題 36 (難)(古)>

In 1945, there () () () () forget.
① took place ② the world ③ an incident
④ will never ⑤ that

In 1945, there (took place)(an incident)(that)(the world)(will never) forget.

→ 1945年、世界がこの先決して忘れることがないような事件が起こった。
・ <there>から始まっているが be 動詞がない。
・ 動詞候補は<forget>と①<took place>の 2 つで、つなぎ語が⑤<that> 1 つだから計算が合う。
・ 主語候補は②<the world>と③<an incident>の 2 つ。
・ 以上から<an incident took place>と<the world will never forget>の 2 文が思い浮かぶ。
・ つなぎ語<that>を関係代名詞と捉え、<an incident took place that the world will never forget>としたいのだが、<there>とのつながりが良くない。
◎<An incident took place there.>の完全逆転型に思い至れば、関係詞の直前に先行詞<incident>が来る安定した英文になる。

★次の表現が狙われる！

「There V S.」のパターン。動詞が be 動詞でないことに注意。出現・存在の自動詞と共に用いられる。

<出現・開始> <存在>
There { appear
happen
occur
take place
rise
come
begin } +S. There { live
stand
remain } +S.

* 先行詞と関係詞が離ればなれになることがある。「SV」の「S」を飾りたい場合がそれだ。

An incident took place
↑
that the world will never forget

先述したように、I 型（第 1 文型）はただでさえ安定性に欠ける。「SV」の真ん中に飾りを挿入しようものなら、「SV」のリズムが崩れ、何が言いたいのか分からなくなる。だから「S+飾り+V」にしたい所を「SV+飾り」にして文を安定させることを優先するわけだ。

4-4 強調構文型

倒置と強調構文とを一括(ひとくく)りにするのは少々乱暴だが、どちらも特定語句を文頭に出して強調するという共通点がある。

I love you
 It is <you> that <I love>.
 ↑ 強調したい名詞を文頭に押し出す
 ↑ 残りの要素を文末に移動

だからあえて倒置の並列項目として扱った。ご存じのように、強調構文は「It is+強調したい名詞 that+残りの要素」の枠にはめることで特定名詞を強調する手法。<It is>と<that>の語句を元の文に加えるという点で倒置とは異なる。

4-4-① 強調構文の特殊疑問文

<例題40> 全統マーク模試

When () () () () into fashion in Japan?
 ① first came ② it ③ jeans
 ④ that ⑤ was

When (was)(it)(that)(jeans)(first came) into fashion in Japan?

→ジーンズが最初に日本で流行ったのは一体いつのことだったろう。
 ・疑問文であり、疑問詞と文末副詞とが与えられている。
 ◎疑問文に<it><was><that>が混じるのは強調構文を示唆している。
 ・慣れるまでは<Jeans first came into fashion ★ in Japan?>の★を強調構文にし、疑問文化する。
 Jeans first came into fashion **last year** in Japan.
 → It is **last year** that Jeans first came into fashion in Japan?
 → Is it **last year** that Jeans first came into fashion in Japan?
 → **When** is it that Jeans first came into fashion in Japan?

★次の表現が狙われる!
 疑問詞+ is it that+文?

4-4-② 「S counts. (Sは重要だ)」の強調構文型。

<例題41> 慶応大

It is not what you read but () () () ().
 ① that ② it ③ how
 ④ read ⑤ counts ⑥ you

It is not what you read but (how)(you)(read)(it)(that)(counts).

→肝心なのは何を読むかではなくて、どう読むかである。
 ・自動詞<count>の用法は<S+counts.>。残りの要素に役割を割り当てるには強調構文しかない。
 ・頻出パターンとして<It is not A but B that counts.>を記憶しておくのも良い。

<例題42> 明海大・改題

It is () () () () you wear it.
 ① that counts ② but how ③ not only
 ④ you wear ⑤ what

It is (not only)(what)(you wear)(that counts)(but how) you wear it.

→何を着るかも重要だが、着こなしも大切である。

★次の表現が狙われる!
S counts. Sは重要だ。
 →① It is **S** that counts. 重要なのはSである。
 →② It is **not A but B** that counts. 重要なのはAではなくてBである。
 →③ It is **not only A** that counts **but also B**. 重要なのはAだけでなくBでもある。

③の語順を不審がる者が多いはずだ。これも「文の安定」という視点で説明が付く。

It is **not only A but also B** that counts.

上の英文を期待するのが普通だが、これでは強調したい部分が重すぎて頭でっかちの不安定な文となる。かといって強調したい文を全部後ろに回してしまうわけにもいかない。<It is>の直後にはどうしても強調したい名詞を持ってこなくてはならない。

It is that counts **not only A but also B**.

だから、<not only A>を残して、後半の<but also B>だけを後ろに回して文の安定を図る。

It is not **only A** that counts **but also B**.